

### 三 明曆の大火

此騒動の發端を話すのには、先づ明曆の大火から始めねばならぬ。全體江戸といふ處は火事の甚だ多い處である。寛文八年の大火には仙臺屋敷の中、愛宕下の上屋敷、濱屋敷が焼け、元祿十一年には名高い上野根本中堂の火事があつて延焼二里餘に及んだと云ふ。享保十三年にも大火があつて、この時消防夫のいろは四十八組を定めたとの事である。それから明和九年に目黒の大圓寺から出た大火もあつた。このやうな大火が幾らも有る中で一番名高いのは明曆の大火である。江戸の町の様子が昔とは丸で違つてしまつたのは此火事からである。此火事は後西院天皇明曆の三年正月十八十九と二日の間續いて江戸に起つた大火事である。此年は明ける早々から火事があつたので、先づ正月元日には四谷竹町に火事があり、同二日には松平越後守の上屋敷、同日巳刻には赤阪町、同七日には吉祥寺の近處の中間町にあるといふ様に毎晩始まる。これは何もう油斷がならぬと思つて居ると、それから少し遠のいて、同十八日の晝過ぎから北風がひどく吹いた。すると本郷丸山本妙寺といふ寺から火が出て、本郷三丁目を焼拂ひ、翌十九日の辰刻まで燃えたとあるから今ならば午前八時頃まで燃えて居たのである。この火事に江戸の人は大層驚いて居ると、同十九日晝頃から小石川傳通院前の新鷹匠屋敷から出火した。これも收まつて先づ一安心と思ふ間もなく、其日の夜の八時頃に麴町七丁目から火が出た。或は五丁目から書いた本がある。共に其日の聞傳へを書いたものであらう。今になつてはどちらが事實やら分らぬ。何しろ麴町から火が出たに相違ない。この火事が二日の火事の中で一番大きな火事であつて、火の手が眞に盛んで、とうとう本丸、二の丸、三の丸もすつかり焼けて將軍家は西丸へ移り、江戸の

町の目抜きといふべき所は大概焼けて、日々澤山の死人があつた。

こゝに講釋師などが大層うそ話をするところがある。それは此の明暦の大火に紀の國屋文左衛門が前から火事のあることを見抜いて大儲けをしたと云ふことゝ、原田甲斐が紀の國屋を頼んで兵糧の用意をさせて功名をしたと云ふことである。一體講釋師などを相手に彼是いふのは大人氣ない話であるが、世の中には講釋師の嘘を眞實の話と思ふ人もあるから一寸辯じて置く。第一紀文といふ人は寶永正徳の時分が眞盛りの人であつて、山東京傳の奇蹟考などに據ると亨保十九年に死んだとある。亨保十九年から明暦三年に遡れば七十七年前である。紀文が百まで生きた人なら知らぬこと、七十八までの上壽を保つたにした處がまだ當歳の赤子である。若し五六十で死んだ人なら未生の男である。未生の男や赤子が何うして火事を見抜いて大儲けをやうぞ。すべて講釋師の話にはこんな類が多い。

此時焼けないのは西の丸に、山の手、淺草、芝、西の久保、麻布、市ヶ谷、赤坂だけであると云ふ事である。尤も此時、仙臺屋敷の中で芝の櫻田上屋敷、櫻田本屋敷、それから濱の下屋敷、愛宕の中屋敷は焼けたけれど、麻布の仙臺屋敷は焼けなかつた。然るに講釋師などに云はせると、此時仙臺の七屋敷が悉皆焼けてしまつて、奥様も女中も御殿山へ立退きになつた。其處へ原田甲斐の差圖で、紀の國屋文左衛門から炊出しを出したので、流石に甲斐は智者ぞと褒められたなどと云ふ話をするが、それは根據のないことである。斯様に火事が大きくなつたのも、其頃までの江戸の町は大名屋敷は後世よりも却つて立派であつたが其他は草葺や板葺が多くあつて、瓦屋根などは殆どなかつたからである。江戸が多く瓦葺になつたのは、此火事から後の事である。さて此火事がすむと、直ぐ雪が降つて、それが爲めに大層難儀したものがあつたと云ふことを或書

一 當歳 その年に生まれた事。數へ年で一歳である事。

に書いてある。これは事實であらう。奮曆きうれきの正月中旬、太陽曆の二月中旬には江戸はきつと大雪のある例れいであるから、此時も雪がふつたのであらう。

何しろ此大火事は江戸開府以來の騒ぎであるから、色々の風説があつて、人々安き心なしといふ有様であつた。これより六年前に浪人由井正雪、丸橋忠彌の騒ぎがあり、五年前に浪人別木などの陰謀事件があり、其餘熱がまだ残つて居る時分であつたから、これは何様由井、別木などの殘黨が、世上を騒がせる爲に火を放けたに相違なからうなど、云ふ噂もあつた。或はそれ處ではない、大名の中に謀叛の企てがあつて、斯様に火を放けたなどと云ふものがある。何の世でも取留めたことのない大嘘話で人を騒がせて喜ぶものもあり、詰まらぬ事を想像して慌てるものもあるが、此時は殊にひどかつた。其處で火事がすんだ翌日、即ち正月二十日に幕府の營中に於て、色々相談があつた。其の時三家の中の誰やらが、老中に向ひ、今度の大火は何うも唯事ではない、火事とばかり思召すは御油斷であらう。早速、箱根、碓氷に人數を御遣はしになつて、要害を御固めになつたら善からうと云つたものがあつた。しかし、此頃の老中は後の世の老中とは違つて、みんな一廉の人物であつたから中々あわてない。中にも松平伊豆守信綱朝臣と云ふのは其頃の故老でもあるし、剃刀の刃を渡るほどの智慧伊豆と云はれて名高い政治家であつたが、此話をきいて、斯様な火事は何度も有るべきなれば、銘々たゞ火の用心が肝要でござらうと言つた許りで一向平氣なものであつた。そこで其話はそれ限りになつてしまつて、其日關八州だけの在々所々へ、今度江戸に於て大火出來し御城まで焼亡いたすと雖も、少しも別儀これありしにあらず、斯様のことは此後と雖も幾度も出來申すべければ、聊かも氣遣ひいたさず、當作も油斷なく仕付けるやうにと觸れ、小十人組の與力を使に出して説諭をさせたので、一旦騒ぎ立てた人

二 浪人由井正雪、丸橋忠彌の騒ぎ 慶安の變。由井正雪一味の陰謀が露顯し、丸橋は逮捕され、由井は自殺する。

三 浪人別木などの陰謀事件 幕府老中を殺害しようとした浪人達が逮捕される。

四 營中 柳營中の謂ひ

五 當作を仕付ける 今年の作物を作りつける、特に田植えをする。

六 小十人組 江戸幕府の職名。若年寄に屬し、戦時には將軍馬廻の警護に當り、平時には小十人組番所に話めて、將軍出行の際に先驅として供奉した。

心も拍子抜けがして穩かになつた。此日の事である、水戸黄門頼房卿から老中へ内談いたしたきことある故屋敷へ来てくれと云ふ招きがあつた。この時伊豆守は殿中に詰め、諸事取捌いて居たので隙がないから、外の老中だけ打揃つて水戸の屋敷へいつた。すると頼房の言ふには、今度の火事の體、心元なき次第である。三家の中でも紀伊殿、尾張殿は國元が遠方であるが、我等は領分が近いから、内々國元から人數を呼寄せて置かうと存ずる、自然人數御用の時などは、當屋敷に仰付けらるゝやう取計はれたしと云ふことであつて、老中たちも水戸侯が本家を思ふ志の厚いことを感心して、成程御尤もの次第でござる、早速其通り御取計らひありて然るべう存ずる、然りながら今日は伊豆守殿中に相詰め參上いたさざるゆゑ、明日召寄せられ右の通仰せ聞けらるゝやうと、挨拶して其日は一同引取つた。然るに翌日、伊豆守水戸家へ行き、老中一同に仰せの趣御尤もと申上げたのは合點のゆかぬことで御座ると言つた。水戸侯はなんで伊豆守は左様御異見をいはるゝぞと尋ねた。すると伊豆守の説が面白い。今度の火事は天災でござる。天災なれば幾度もあるに相違ない。幾度あつても天下の爲めに氣遣ひなる儀はござらぬ。唯一時諸色が高くなることのみが諸人の迷惑でござる。然るに水府にて御内々人數を召寄せらるゝとあるからには、たとへ何程御穩密に遊ばしても、自然隠すことは出来ぬものでござる。若しさうなれば宇都宮、古河、岩槻、笠間、土浦など申す關東譜代の諸侯に於ても、必ず追々聞付けて、如何様仔細ありと存じ人數を召寄することとござらう。斯様に人數が江戸に殖えては、いよ／＼諸色は高値になつて諸人難儀を致すべしと心配仕ると云つた。黄門卿も唯人ではないから、成程尤もなりと言下にさつて、其事は止めになつた。諺にも、一疋の馬が狂へば千疋の馬が狂ふと云ふことがある。それとは反對で伊豆守一人騒がなかつた許りで江戸中が静まつたのである。

七 諸色 物価。

八 水府 水戸藩の別名